

## まず言葉の教育を

前著『石井式漢字教育革命』で、「黄色い縞模様のある蝶を見ても、“黄色”や“縞”という言葉を知らない幼児には、その蝶の特徴が目に入るだけで、意識されず、従って、記憶できない」という実験例を述べ、「人間は言葉で物を見、考える」ので、言葉の教育があらゆる教育の基礎であり、最も重要だと述べました。

また、狼に育てられた少女が、まったく人間性を持たなかったけれども、わずかながら、言葉を覚え、これを使うことで人間性を具え始めた、という事実も、何より言葉の重要性を物語っていると思います。

だから、私はまず第一に、言葉の教育を重視することをお奨めします。言葉の教育とは何か、子供に言葉を語りかけることです。全身に愛情をみなぎらせて、やさしく語りかける機会を少しでも多く設けることです。子供に面と向かい合って、その目をやさしく見つめながら、子供に語りかけることです。高からず、低からず(とは言うものの、いく分高め)、速からず、遅からず(とは言うものの、いく分ゆっくりめに)自分に表現できる最高の言葉で語りかけることです。

いつもそうすることはむずかしいでしょうが、とにかくそういう努力をすること、そういう意識を持つことです。何でもそうですが、とりわけ言

葉の学習は“模倣”の一語につきます。だから、何よりも良い手本が必要です。良いお手本は、親しか与えることができません。

昔からよくやることですが、「いない、いない、ばあ」や「おつむ、てんてん」などのように、動作と言葉とがいつも伴って同じ形を取るような所作は、言葉の学習の初期には特に有効なものです。できる限り、くり返しくり返しやってやるのが大切です。

子供というものは、くり返しを非常に好むものです。世界的な数学者として知られた、故・岡潔先生は、お孫さんを通してそのことを次のようにおっしゃっています。「初めて鐘を鳴らして見せた時は“オヤッ”というような表情を見せる。二度目には“さっき聞いたことのある音だ”というような、なつかしい物を眺める表情に変わる。ところが三度目になると、“もっと鳴らせ”と要求して、いつまでたってもそれに飽きる様子がない」と。

これは幼児の姿をよく表現しています。幼児はだれでもこういうものですから、それを体得することができ、能力を育てることができるのです。しかし、そのためには三回までは同じことを繰り返して手本を示してやるが必要であり、また、それ以後、子供がさらにそれを繰り返すことを要求したら、いくらでもその要求に応えてやる必要がある、ということも、親たる者は知らなければなりません。